ライフル　～～転生させくれるんなら、もうちょいチートにしてくれたっていいだろォがァァァ

Veritas

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
剣、魔法、そしてアサルトライフル　～～転生させくれるんなら、もうちょいチートにしてくれたっていいだろォがァァァァァァァァァ！！！～～

【Ｎコード】
Ｎ３８９１Ｌ

【作者名】
Ｖｅｒｉｔａｓ

【あらすじ】
ハイ、俺、バカな神様の所為で何処かのＲＰＧ世界に転生しちまいました！
というお話。
つーかバ神様、チートな能力くらい付けてくれたっていいだろ…
ホンマにたのんまっせ……

プロローグ：へんじがないただのしかばねになってしまったっぽい（前書き）

ハイ、どーも。
作者のＶｅｒｉｔａｓ（ベリタス）でーす！！
何か始めちゃいましたー！！
暇つぶしにでも読んで下さいねー！！

プロローグ：へんじがないただのしかばねになってしまったっぽい

「アレ？」

何で？

何で俺の視界は真っ赤なの？

何で俺の足は地面に着いて無いの？

何で体の右半分はズキズキするの？

何でこんなに騒がしいの？

何で真っ赤な視界さえも、黒く染まってきたの？

アレ？　何で？

≫≫≪≪

俺は道を歩きながら、ケータイで小説を読んでいた。
ある作品の二次創作だ。
中身を掻い摘んで言うと、主人公が神様の手違いで死んで、そのお詫びにチートな能力を付けてアニメやらマンガやらの世界に転生する、というものだ。
そしてそのチートな能力というのが、これまた別のアニメやらマンガやらの技を繰り出したり、とかいう奴だ。

「で、ここから原作ブレイク、ってか」

俺は1人呟く。

「最近よくあるよな、このパターン」

最近こういうのって流行ってんのかな？

「…まあ、ベタでも面白けりゃいいけど」

1人でブツブツ言いながらケータイのボタンでページをめくる俺。
周りからの視線？何それおいしいの？
まあ、そんな感じでズンズン進む俺。
目的地のコンビニの前で信号待ちしている時もこんな感じな俺。

そのその時だった。

アスファルトとタイヤとが擦り切れる時のような音の後、

俺の体に激痛が走ったのは。

プロローグ：へんじがないただのしかばねになってしまったっぽい（後書き）

感想、アドバイスなどを受け付けています。
出来れば送って下さい
m（＿＿）m

プロローグ2：可愛いネーチャンｙｅａｈ！

プ～カプカ♪
プ～カプカ♪
はい、どーもこんにちは。俺です。
さて、さっきの疑問のことなんだけど、すぐに解決しちゃったわ。
どうやら俺、トラックに跳ねられたっぽい。つーか、跳ねられた。
現に俺、死んじゃったからね。
半透明な身体でお空をプカプカ浮いちゃってるからね。
うふふ～、気持ちいいな～♪
気持ちいいな～
気持ちいいな～…
気持ちいいな～……

「……」

うん、現実逃避は止めよう。
何か余計傷が深くなったような気がする……
…はぁ……
まさかこんな形で死ぬとはな。
まさかこんな形で皆とバイバイすることになるとはな……
…はぁ……

「あの、すみません」

誰だよ、こんな時に話し掛けてくる奴は……
そう思いながら振り向くと…
「『山門（ヤマト）武（タケル）』様、ですよね？」

何ともまあ綺麗なネーチャンがいたモンだ。
…背中から翼生えてるけど。

「…ドチラサマデスカ？」

一応訊くだけ訊いてみよう。

もしかしたら、俺に一目惚れしt「天使です」…やっぱりかよ、ちくせう。
やっぱり天使でしたか。
ということは……

「あなたを迎えに来ました」

やっぱり、そうなるのね……

「では、山門（ヤマト）武（タケル）様、私の後に着いて来て下さいね」

…何で俺の名前知ってんだコイツは。
まあ、そこはどうでもいいか。
何か「天使ですから」とか言われて話を終わらせられそうだし。
つーか問題はそこじゃなくて……

「俺、どうなんの？」

俺がこれからどうなるか、だ。

「取り敢えず、黄泉の門に行きましょう。
成仏するにもこの世に残るも、そこで話を進めなければなりません

から」

はあ……やっぱそうなんのか。
しかし、黄泉の門、ねえ…
どんな所なのやら……

「では、山門（ヤマト）武（タケル）様、今から黄泉の門へご案内致します」

取り敢えず今はこのネーチャンについて行った方が良さそうだ。
そう思った俺は、空高くネーチャンの背中を追っていくのであった。

≫≫≪≪

ほえ～、ここが黄泉の門か～。
ナニコレメチャクチャデカイ。
高さが高層ビル並じゃねえか……

「では、こちらに」

そう言ってネーチャンは門の近くにあった建物――――これはまんま高層ビル――――に入っていった。
俺も彼女の背中を追いかけるようにして建物の中に入る。
そんな俺の視界に現れた者、それは、

「ようこそ、『黄泉の門・日本、九州支部』へ！」

美人のネーチャンが2人！
あ、一方はさっきの天使さんね。
残りの1人は、多分受付嬢だ。

「どーも、こんにちは。
で、俺は何をすればいいの？」

2人の中に俺が入り込む。

「こちらのアンケートに回答して下さい」

そう言って受付嬢が俺に渡してきたのは、アンケート用の紙。
内容は、自分自身の人生に関する物だった。
例を挙げるなら、いつ産まれたか、とか、いつ結婚したか、とか、
初体験はいつか、とか。
適当に回答したそれを受付嬢に渡す。

「ご回答、ありがとうございました。
さて、これからのことなんですけれども……」

はいきた。重要な所。

「成仏コースと幽霊コースとがありますが……」

何故か言葉を詰まらせる受付嬢。

「どうした？」
「……誠に申し訳ありませんが……」

何だよ、焦れったい。

「その……

…天国が満員で、成仏コースが選択不可能なんですよ」

ああ、そんなことか。

「誠に申し訳ありません」

「いや、いいよ。

元々、成仏するつもり無かったし」

未練タラタラの状態で成仏なんて出来るか。

「それでは……」

「ああ、幽霊コースで。頼むよ」

ふう、これでまた元の場所に戻れるぜ。

身体は失ってしまったけど。

だが、俺が幽霊になることさえも認めないという声が上がった。

「異議あり！」

声の主は、天使のネーチャン。

何かどっかの弁護士よろしくな感じで訴える。

「何で？」

理由が欲しい。

ホント、何で？

「…武様、私、先ほど密かに武様のことを調べてみたのですが……」
オイコラ、何本人の許可無しでやってくれてんだ。
「武様の魂は、負を受け入れ易いのです」
……は？
「かいつまんで言いますと、武様が正式に幽霊になった場合、２日で悪霊になってしまう可能性が高いのです」
……マジ？
「と、いう訳で、私は武様の幽霊化はお薦めしません。
悪霊になった所で、いいことは何もありませんからね」
……
……
……何かヘコむわ～
「…じゃあ、俺はどうすればいいの？」
成仏できないわ、幽霊になることを許されないわ、俺はどうなるんだ…？
すると天使のネーチャンは受付嬢に向かってこう提案した。
「……特別措置として、別世界への転生は認められませんか？」
……は？

何その小説的措置？
すると受付嬢は、

「転生、ですか……
少々お待ち下さい」

そう言って、手元の電話を取ると、何処かに回線を繋げた。

「ジェノヴァ様、こちら受付Ｎｏ．４です。
ええ、実は……ということで……はい……分かりました。…
はい、では」

どうやら電話は終わったようだ。
そんな彼女は俺の方を向き、

「ジェ(CEO)ノヴァ様直々に話がしたいそうです。
今からジェ(CEO)ノヴァ様の元へ案内しますから、私について来て下さい」

立ち上がって、ニッコリ微笑んだ。

…ＣＥＯ……
……ＣＥＯ！？

プロローグ２：可愛いネーチャンｙｅａｈ！（後書き）

感想、アドバイスなどを受け付けています。
良かったら送って下さい。
ｍ（＿＿）ｍ

プロローグ3：ぶるあああああ！！（前書き）

今回テイルズネタが入ります。

プロローグ3：ぶるあああああ！！

「よぉこそ、『黄泉の門・日本、九州支部』へ」

どーも。
皆さん方、こんにちは。
山門　武　でーす。
えー、俺は今、ＣＥＯに会ってます。
ここ、黄泉の門・日本、九州支部の一番上の人に。
……つまり、ここ担当の神らしい。

「我がここのＣＥＯ、ジェノヴァ、であ～る」

うん、俺、その神、ジェノヴァさんを見てすぐにある人物を思い出したね。

……どう見ても色違いのバルバトスです。本当にありがとうございました。
オマケにホント若本ヴォイスなんだけど。
超ソックリ。

「……ジェノヴァさん」
「どぉした？」

よし、ダメ元で頼んでやる。

「お願いします、一度でいいので『アイテムなぞ、使ってんじゃ無ぇぇぇぇーー！！』って叫んでくれませんか？」

「……アイテムなぞ、使ってんじゃ無ぇぇぇぇーー！！」

おおお！！
言ってくれた！
言ってくれたよこのバルバトス（レッド）！

「ありがとうございました！」
「気は済んだか？
では、本題に入ろう」

おっと、そうだった。
俺はジェノヴァさんに勧められるまま、ソファーに座った。
俺の隣に天使のネーチャンが、向かい側にジェノヴァさんと受付嬢がテーブルを挟むように座る。

「では、このことなんだが……」

≫≫≪≪

俺の今後が決まった。
どうやら俺は、今の記憶を持ちながら、別の世界へ転生することになるらしい。
で、その『別の世界』というのが……

「うはっ、ＲＰＧの世界か」
剣と魔法のＲＰＧな世界だ。
そして俺は武器を持って転生するのだが、その武器というのが……
「……アサルトライフル！？」
これまたデカイ、鉛を撃ち出す鉄の塊だ。
因みに弾は、自分の持ち物入れであるバッグに自動的に入るらしい。
「但し、」
何すか、ジェノヴァさん？
「弾は１日につき、マガジン３つ分のみだ。分かったな？」
何…だと……！？
……まあ、いいか。
そんなことより、
「ジェノヴァさん、俺、今から転生するんすよね？」
「そうだが、何か？」
「いやー、こういう時って、何かしらチートな能力を貰えたりとか
「甘ったれんじゃ無ぇ！」ヒイッ！」
え！？
「そんな小説みたいな話があると思うなよ！」
えぇぇぇぇーー！？

「…と、言いたいところだが、」

え？

「特別に付けてやろう」

ジ、ジェノヴァさん……

「今日の俺は紳士的だ。運がよかったな」

「ありがとうございます！！」

俺はソファーから立ち上がり、一礼した。

そんな訳で俺はチート能力を授かることになった。

……はずなんだけど……

ぶっちゃけ、そこまでチートじゃ無い。

俺が授かった能力、それは、

『ある条件下においてのみ、２つの技が使用可能となる』というものだった。

で、その２つの技なんだが、１つは『ジェノサイドブレイバー』である。もう１つは知らね。

因みに、このことについてジェノヴァさんに文句を言ったら、あの人、デッカイ斧を持ち出して、

「死ぬかぁ！

消えるかぁ！

土下座してでも生き延びるのかぁ！」

とか言ってブチ切れた。
俺はすでに死んでるけど、それでも十分怖かったから、
「すみますぇんっしたぁ！」
ジャンピング土下座してでも生き延びることにした。
はあ、マジおっかねえ。
……と、まあ、
そんなこんなで転生することに。
「では、逝ってこい」
ジェノヴァさん、字が違う！
「逝ってらっしゃいませ」
天使のネーチャンも！
「それでは、いくぞ！
転・生！
ぶるあああああ！！」
ジェノヴァさんの雄叫びと共に、俺の足元に魔法陣らしきものが現れ、俺はその魔法陣に呑み込まれていった。

1―1：そんなこんなで転生しました。（前書き）

ついに第1章突入！

1―1：そんなこんなで転生しました。

「…うーん」

アレ？

いつの間にか寝てたみたい。

「……んっ」

眠い体を起こして、

「……ぐぅぅぅーー……」

思い切り伸びをする。

「……っはあ」

そして脱力。

こうして俺は、心地良い朝を迎えたのであった。

……て、ちょい待ち。

「……ドコダココ」

俺の脳がやっとこさ起きたときにできた、最初の疑問。

一言で言うなら、俺がいる場所は、山小屋だった。

木製のベッド。木製のテーブル。木製の椅子。天井まで伸びるレンガの暖炉。そして、辺りに広がる樹木の香り。

……何で俺こんな所にいるんだ？

そう思ってると、

「目が覚めたんですね！」

玄関先から、可愛らしい声が聞こえてきた。

声の主は…

蒼髪碧眼な娘。

…なにこのこ、かわいい。

その娘は俺の姿を見るなり、安心したようだ。

「良かった……！」

……いやいや、全然良くねーんすけど。

何、意味分からん。

「どういうこと？」

声に出てしまった。

「……覚えていらっしゃらないんですか？」

は、何が？

「あなた、天から降って来たんですよ」

……Ｗｈａｔ？

「これらと一緒に」

そう言ってこの娘が手に取って俺に見せたもの、それは、

黒いバッグと、アサルトライフル。

「思い出したァァ！！」

「キャッ！」

「あ、ゴメン……」

声を荒げた所為で、ビックリさせてしまった。

……そうだった。

俺、転生したんだった。

ＲＰＧっぽい世界に……

》》《《

「て、転生、ですか……」

結局、俺は全てを話した。

他言無用を条件に付けて。

本当は、教えたくなかったんだがな……。

でも流石にラ〇ュタの冒頭の〇ータよろしくな感じの所を見られたからな……

ごまかすより真実を話した方がいいだろう。

ってことで教えた訳だ。

因みに話が終わった途端、

「……あ、もうこんな時間！

それでは、私、仕事がありますので」

そう言ってあの娘が慌てて出かけていった。

因みにあの娘、名前は『トゥーナ』というらしい。

……さて、ここからどうなることやら……

1―1：そんなこんなで転生しました。（後書き）

感想、アドバイスなどを受け付けています。
できれば送って下さいね。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3891l/

剣、魔法、そしてアサルトライフル　〜〜転生させくれるんなら、もうちょい

2010年10月10日12時25分発行